学校実施型への挑戦

同じ高校の生徒同士が学びについて語り合う新しい「未来PJ」が始まる

2012年度までの「高校生未来プロジェクト」の結果を受け、13年度は初めて学校でワークショップが実施された。同じ空間で高校生活を送る者同士が、学びの意味や目的について真面目に語り合うことは出来るのか、そして、学びの意欲は高まるのか。実施内容や条件を変えながら、4つの高校で検証が行われた。

学校という日常の中、生徒の対話は深まるのか？

「ポスト3・11　高校生未来プロジェクト」（以下、未来PJ）のワークショップ終了から3か月、6か月が経過しても、参加した高校生たちの学ぶ意欲が維持・向上していたことは、学びの意味や目的を高校生同士が語り合うことの意義を十分に実感させるものであった。

だが、2012年度までの未来PJは、全国から集まった高校生によってつくられた非日常の空間であった。参加した高校生たちが「学びの意味や目的を学校の中で語り合うことがない」「初対面の相手だから、どう思われるかを気にせずに自分の意見を言えた」と振り返る中、真面目なことを語り合う場を学校の中につくることが出来るかどうかが、次の課題として浮かび上がってきた。一方で、2012年度の未来PJの取り組みとその成果を紹介した本誌2013年6月号を読んだ全国の高校教師からは、「自分の学校でこうした取り組みに挑戦してみたい」という申し出が寄せられるようになっていた。

そこで、ベネッセ教育総合研究所では、過去の未来PJで行ったような高校生同士の対話の場を、実際の学校現場につくったとしても、学びの意欲を向上させる効果が得られるのかを検証するために、13年度は4校の高校でワークショップを実施することにした。

異なる条件のもと全国4校でワークショップを実施

4校で実施された未来PJは、同じ高校に通う生徒が集まって行うという点では同じだが、ワークショッ

初芝富田林高校では、2日間連続で各回6時間、合計12時間のワークショップが行われた。

プを行う日数、生徒の募集方法などは異なっている（下図参照）。特に、今回初めて「全員参加」という形態を採った学校もあったため、ワークショップそのものへの参加意欲が、得られる成果にどのような影響を及ぼすのかも大きな関心事となった。

ワークショップの内容の細部は学校によって異なるが、まずは生徒同士で語り合ったり、先輩の大学生や社会人の話を聞いたりすることで学びの意味や目的を拡散的に考え、その後一人ひとり考えたことを収束的に深めて、それぞれの言葉にしていくという大きな流れは共通している（P.12・13参照）。

2012年度のワークショップと比較すると、ワークショップ中に私語をしたりふざけたりと、ワークショップに集中できない生徒が散見された学校もあった。しかし、そのような生徒も、ファシリテーターの指示で語り合いを行うグループを変えたり、大学生や社会人が語り合いに参加したりすることで、適度な緊張感を持って語り合いに参加できる

「高校生未来プロジェクト」学校実施型・全体概要

埼玉県立大宮光陵高校

◎1986（昭和61）年開校。普通科（普通科内に外国語コースを設置）、音楽科、美術科、書道科の4学科1コース／全日制／共学／1学年普通科240人（うち40人は外国語コース）、芸術系学科120人／14年度入試では、国公立大は、筑波大、東京学芸大、東京芸術大、東京工業大などに15人が合格。私立大は、東京音楽大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ331人が合格（現浪計）。

実施日	実施形態	参加対象者・人数	参加形態	備考
2013年11月9日（土）、12月21日（土）、2014年1月18日（土）、3月15日（土）の全4回。各回4時間	通学型	高校1・2・3年生、男女約30人	任意参加	教員向け体験研修を2時間実施

東京都・私立白梅（しらうめ）学園高校

◎1964（昭和39）年開校。建学の理想として「ヒューマニズムの精神」を掲げ、生徒一人ひとりの人格を尊重した教育を行っている／全日制／女子／普通科（特別選抜コース、選抜コース、進学コース）／1学年250人／14年度入試では、国公立大は、東京外国語大、東京学芸大、一橋大などに6人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、津田塾大、早稲田大などに延べ161人が合格（現役のみ）。

実施日	実施形態	参加対象者・人数	参加形態	備考
2013年10月23日（水）、10月30日（水）、11月6日（水）、11月20日（水）、12月9日（月）の全5回。各回2時間（最終回のみ4時間）	通学型	高校1年生、1クラス、女子39人	全員参加	ホームルーム及び総合的な学習の時間で実施

大阪府・私立初芝富田林（とんだばやし）高校

◎1984（昭和59）年開校。85（昭和60）年に初芝富田林中学校を併設／全日制／共学／普通科／1学年337人／14年度入試では、国公立大は、北海道大、東北大、京都大、大阪大、九州大などに110人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、関西大、関西学院大、同志社大、立命館大などに延べ551人が合格（現浪計）。

実施日	実施形態	参加対象者・人数	参加形態	備考
2014年3月13日（木）、14日（金）の全2回。各回6時間	通学型	高校1年生、男女54人	任意参加	教員向け体験研修を2時間実施

山口県・私立慶進中学・高校

◎1928（昭和3）年創立。2002（平成14）年、慶進高校に改称。2004（平成16）年から慶進中学校を併設／全日制／共学／普通科（中高一貫コース、アドバンスコース、グローバルコース）／1学年258人／14年度入試では、国公立大は、東京大、大阪大、広島大、山口大、九州大などに70人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、福岡大などに延べ308人が合格（現浪計）。

実施日	実施形態	参加対象者・人数	参加形態	備考
2014年3月27日（木）、28日（金）の全2回。各回6時間	合宿型	高校1年生、中高一貫2クラス、男女63人	全員参加	教員向け体験研修を2時間実施

ようになっていった。このように、学校の状況によっては「生徒を飽きさせない工夫」がより必要な場合もあることが確認された。また、一定の期間を設けて複数日程で行う場合、前回までの気付きを生徒自身が忘れてしまわないような仕組みづくりも必要であることが分かった。

校内での対話を通して生徒の学びの意欲は高まる

ワークショップに参加した生徒に、事後アンケートで「ワークショップ受講前の勉強のやる気を100とした場合、受講直後のやる気はどれくらいか」と尋ねたところ、平均で216という高い数値結果が得られた。また、生徒からは次のような感想の声が寄せられた。

「自分と違う意見や考えを聞くことで、ものを考える視野が広がった」

「有言実行するべく、これからしっかり勉強していこうと思った」

「考え方が大人になった。難しいことにも興味を持つようになった」

「人の意見を聞くことによって、考え方や視野が広がり、自分が変わ

「高校生未来プロジェクト」学校実施型ワークショップの流れ（例）

1 ジブンガタリ（＊）

普段は話さない「自分のこと」を話す

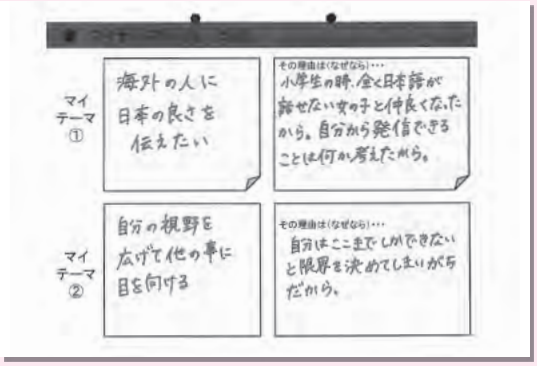
4人程度のグループになって、以下のような項目について、1人5分ずつ話をする。思ったことを素直に語り、それに対して周りの生徒は相手のために聴いてあげることで、「みんなで安心して話せる雰囲気」をつくっていく。

◎「ジブンガタリ」のテーマ例
- 小さい頃、自分はどんな子どもだったか
- 今頑張っていること
- なぜ、何のために勉強すると思うか
- 勉強についてモヤモヤしていること
- これまでの挫折やうれしかったこと
- 将来、何をしたいか、どうなりたいか
- 大学は何のために行くのか

2 マイテーマを考える

自分なりの問題意識を設定してみる

「ジブンガタリ」を踏まえて、自分なりに見いだした中長期的な展望となる「マイテーマ」を考える。ただし、1つに絞り込む必要はなく、また、あいまいな言葉、漠然とした表現でもよい。前に進むための指針として、ひとまず仮決めする。



3 先輩とのセッション

身近な大学生、社会人との対話を通して自分を見つめる

大学生や社会人の先輩が、高校時代の悩みや、高校時代の学びと今の自分のつながりを語る「ジブンガタリ」を聞いて、視野を広げていく。先輩の話を聞いて生徒は感想シートを書き、その後、グループ内で感想を共有する。

◎先輩の「ジブンガタリ」のテーマ例
- 高校時代の自分、悩んでいたこと、乗り越えたこと
- 大学で真剣に取り組んでいること
- 社会に出て（大学を出て）したいこと、どんな仕事がしたいか
- 高校での勉強の意味や目的について、当時どう思っていたか。今思えば、もっと何をしておけばよかったか

大学生や社会人が自分自身の高校生活を振り返りながら、学びの意味や目的、更に社会の課題について後輩たちと語り合った。（写真上は初芝富田林高校、写真下は慶進中学・高校）

＊「ジブンガタリ」は、株式会社スコラ・コンサルトの登録商標です。

ることが分かった。そして、夢を人に伝えたことによって、もっと頑張らないといけないと思った」

学びの意味や目的は、なぜ外向きになるのか？

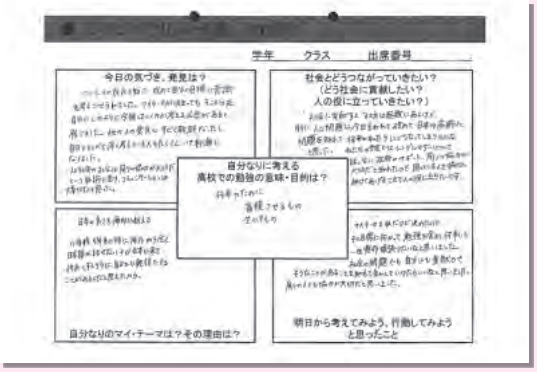
全国から参加者を募った2012年度のワークショップでは、社会が抱える課題に対して高い意識を持ち、早い段階で学びの意味を社会貢献と結び付けて語る高校生は少なくなかった。今回の学校実施型では、社会貢献について語る生徒は決して多くはなく、むしろ「勉強は進学のために必要」「高校生なのだから勉強して当然」などと語る生徒が大半であった。だが、それでもワークショップ終了後には、学びの意味や目的を、他者との関係構築や社会の発展と結び付けて語るようになっていた生徒が少なからずいた。

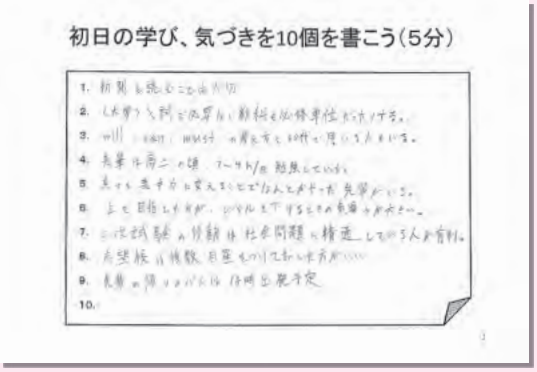
そうした生徒の内面の変化はなぜ起きたのか。次ページからの参加生徒のインタビューと、協力校の教師たちによる座談会を通して考える。

4 ジブンヅクリ

自分の考えを深め、他者と共有する

ここまでに接してきた様々な意見を踏まえて、自分の中に生まれた考えを深め、具体的な言葉にしていく。ここから生徒の思考は収束に向かう。「自分なりに考える高校での学びの目的」をグループの中で共有する。





学びの意味、目的を言葉にしていく。（写真は、初芝富田林高校）

5 400字小論文

グループで読み合って感想を共有する

一人ひとりの考えを更に深める場として、「学ぶってどういうこと？」をテーマに400字小論文に取り組む。文章構成の大まかな流れは例示されるが、感じたことや気付いたことを自由に書く。書き終わったら、グループ内で読み合い、感想や気付きを共有する。

6 半年後の自分への手紙

未来の自分と対話する

ワークショップで学んだこと、これから行動していきたいこと、頑張ったであろう半年後の自分へのメッセージなどを書く。ワークショップでの気付きや感動を半年後に思い出すための仕掛けとなる。

◎自分への手紙の内容例

- このワークショップで学んだこと
- どう社会と関わっていきたいか
- 今のマイテーマ（興味・関心、問題・目的意識など）
- 自分なりの学ぶことの意味や目的
- これからどう勉強していくか
- いつまでに、何をしていくか（目標設定）
- 目標が達成できた時の自分のイメージ
- 半年後の自分への労（ねぎら）いの言葉

※半年後、目標の状態になれていなかった場合に自分に掛けてあげたい言葉を入れてもよい